

## 現法王、自叙伝を刊行する

本年3月19日、Heyper-Collins 出版社よりローマ法王の自叙伝『人生—歴史の中における私の歴史』が刊行された。本書は、ヴァチカンのオブザーバーで、法王の親しい友人であるファビオ・マルケーゼの協力を得ており、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ブラジル、フランス、ドイツ、メキシコ、ポーランド、ポルトガル、スペインなどで販売されている。以下、本書の内容を紹介しよう。

### 法王の生い立ち

フランチェスコ法王は、本名をジョルジュ・マリオ・ベルゴリオという。フランチェスコというのは、アッシジの聖フランチェスコに由来する。1936年12月17日生まれの満87歳である。もっぱら父方の祖母ヨハネスとローサによって育てられた。

祖母はイタリアのトリノ方言を使っていたので、法王自身も幼少時代はこの言葉を使っていた。祖母は当初、マファルダ号という船で1927年にアルゼンチンへ移民する予定であった。ところが、お金が無くて乗船券を購入することができなかった。しかし、運命は彼らを救った。マファルダ号はブラジルの沖合で座礁して沈没し、300人もの移民が命を落としたのである。一方、ようやくお金の準備のできた祖父たちは、1929年2月にユリウス・カエサル号に乗って出国し、2週間後にアルゼンチンに無事到着した。

第2次世界大戦後、祖父はジョルジュをよく映画館に連れて行ってくれた。ロセリーニの『ローマ・解放された街』、ヴィットリオ・デ・シーカの『パイザもしくはドイツ』『子供は我々を見ている』、またフェデリコ・フェリーニの『道』をよく見たものだ。歌に関しては『オーソレミオ』『ザザンはどこ』が好きだった。

飲食店だったか説教室だったか、よく覚えていないが、第2次世界大戦でアメリカが日本の広島、長崎に恐るべき原子爆弾を落としたことを、ジョルジュは知った。原爆を用いたことは人類に対する大きな罪である。このことは人間として、イエズス会員として、決して黙認することはできない。日本人に癒しを与えるために、彼は日本に行こうと決心した。しかし、体調がそれを許さなかった。もし、その時に日本に行くことができていたならば、自分の人生も変わっていたことだろうと、法王は述懐する。

### 若き日の苦悩

戦後、アルゼンチンでは共産主義者が次々と逮捕されていた。「赤狩り」が始まったのだ。聖職者たちは「貧しき者」を救済するために動き回っていた。その姿が、当時の為政者には共産主義の活動に見えたらしい。彼らは共産主義者たちと見なされ、迫害を受けた。若き日の法王もその一人であった。

キリスト教の聖職者は結婚することも妻帯することも禁止されている。法王も若かった時にはその問題で苦悩した。結婚しようか、あるいは独身で過ごそうかと思悩む時があった。修道院に入る前にはガールフレンドがいたこともある。その娘は優しい女性で、映画の世界で働いていた。彼女はその後、ある

人と結婚して子供を授かっている。

法王は、人工妊娠中絶には絶対に反対である。生命は受胎の瞬間から死の時まで続いているからである。代理出産にも反対だ。人間の生命は売買の対象ではなく、子宮を道具のように扱ってはならないからである。

やがてアルゼンチンに独裁政治の嵐が吹きまわった。フランチェスコは、聖職者アンジェレリの教えを信奉していた学生たちを匿ったり、守ったりした。時には、聖職者の衣装を着せて逃したり、自らの身分証を持たせて逃がしたことがあった。

### ヨーロッパ、そしてヴァチカンへの思い

3年ほど前、ヴァチカンにも新型コロナの波が押し寄せてきた。我々の身体を守る薬もできた。法王もすぐにそれを申し込んだ。神の御加護で、コロナにはかからなかった。病院には2、3回入院したが、それは他の病のためだった。

法王はヨーロッパについてこう考えている。ヨーロッパは各国がそれぞれの文化と歴史を持っているが、一つの目標に向かって、つまり世界平和に向かって力を合わせていくことが大切だ。法王は、そのようにハンガリーのヴィクトール・オルバン首相に語った。法王は何度も平和維持や軍需産業の問題について話し、人類に訴えている。「時はきたれり。地球を救うためには時が迫っている。だが、若者に一言言っておこう。だからといって、人々を脅してはならないし、暴力を使ってはならない。」

我々は、全てを抱きしめ、全てを迎え入れる母なる教会を、今一度深く考えるべきだ。そう法王は訴える。同性愛など性的少数者もまた、主をもとめている。しかし、彼らは、今教会から押し出され、排除されている。だが、神はすべての人を愛しているのだ。とりわけ罪深い人をこそ愛しているのだ。同性愛者の結婚は不可能であるが、市民的融合は全く問題が無い。彼らが、他の人たちと同様に、法的擁護を受けるのは当然だ。

法王はまた、被造物を守る声明を発している。「時は迫っている。地球を救おう。若者にこの運動に参加するように呼びかけている。だが、私の言ったことがすべて裏目に出ってしまったら、私は精神科医のところに行かなければならないかもしれない。『法王フランチェスコは気が狂っている』だの『フランチェスコは教皇庁を壊している』だのと言う者もいる。しかし、ヴァチカンは伝統的に君主国家であり、それはヨーロッパで唯一のものだ。それゆえに法王 = 君主という時代が続いているのだ」と。

法王の任務には終わりはない。生きているかぎり、法王の任務を全うしたい。フランチェスコは「私は名誉法王にはならない」と主張する。「もしそれが不可能ならば、一介の神父に戻り、ローマの市民擁護者になりたい。できうれば、告白者の聞き役になり、告白を促し、神意を伝えたい。サンタ・マリア・マジョーレ教会で、その役目を成就できれば最高だ。」

最後は感謝と祈りで締めくくられている。「神様、ありがとうございます。私に健康な体を与えてくださり、危ない時に連れて通ってくださったことを感謝いたします。これからも神にもたれ、神に仕えていくことを感謝し、世界が幸多く、平和であることをお祈りいたします。」